

Title	第1章 1997・1998年度京都大学構内遺跡調査の概要
Author(s)	鎌田, 元一; 清水, 芳裕; 伊藤, 淳史; 富井, 眞
Citation	京都大学構内遺跡調査研究年報 The Annual Report of the Center for Archaeological Operations (2002), 1997・1998: 1-2
Issue Date	2002-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/226708
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

第1章 1997・1998年度京都大学構内遺跡調査の概要

鎌田元一 清水芳裕 伊藤淳史 富井 眞

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターでは、吉田キャンパス及び附属施設での建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財調査を、発掘、試掘、立合に分けて実施している。1997・98年度には、以下の発掘調査2件、立合調査13件、資料整理1件を実施した。

- 発掘調査 総合情報メディアセンター新営予定地（総合人間学部構内 AN22 区）（発掘中，図版1-261）
工学部物理系校舎（第Ⅵ期）新営予定地（本部構内 AU28 区）（第3章，図版1-262）
- 立合調査 工学部物理系校舎（第Ⅲ期）新営にともなう総合人間学部構内実験排水工事
（総合人間学部構内 AR23 区）（第4章，図版1-254）
総合人間学部校舎新営機械設備工事（総合人間学部構内 AQ25 区）（第4章，図版1-255）
京都市水道局給水部配水管敷設替工事（北部構内 BB29 区）（第1章，図版1-256）
総合人間学部校舎新営電気設備工事（総合人間学部構内 AR24 区）（第4章，図版1-257）
工学部物理系校舎（第Ⅳ期）新営工事（本部構内 AU28 区）（図版1-258）
学生寄宿舍吉田寮シャワー室等取設工事（総合人間学部構内 AM21 区）
（第1章，図版1-259）
本部構内等汚水管改修工事（本部構内 AU26 区）（図版1-260）
宇治国際交流会館新営工事（宇治構内）（表5-263）
総合人間学部構内テニスコート新営工事（総合人間学部構内 AL24 区）
（第1章，図版1-264）
総合博物館新営に伴う仮設通路取設工事（本部構内 AV21 区）（図版1-265）
京都大学（中央）基幹・環境整備（とりこわし）工事（本部構内 AX22 区）
（図版1-266）
（医・病）基幹環境整備A工区（総合人間学部構内）（総合人間学部構内 AP21 区）
（図版1-267）
（医・病）基幹環境整備B工区（医学部構内）（医学部構内 AP19 区）
（第1章，図版1-268）
- 資料整理 総合人間学部校舎新営予定地（その2）（総合人間学部構内 AR24 区）
（第2章，図版1-249）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1997・1998年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお総合人間学部構内 AR24 区、本部構内 AU28 区、総合人間学部構内の立合調査については、それぞれ第 2 章～第 4 章でも詳述している。

総合人間学部構内 AR24 区の発掘調査 1996年度に調査した238地点周囲の小面積の発掘であったが、豊富な情報を得られた。とくに、前回調査ではみられなかった中世の掘立柱建物跡や銭貨144枚が出土した土坑の発見は、濠状の大溝で囲まれる内部空間の性格を知るうえで、貴重な成果といえよう。また、弥生時代前期の土器も量的にまとまっており、この調査区の南～西方にかけてが遺跡の中心になっていくことが予想された。

本部構内 AU28 区の発掘調査 周辺の調査区では、弥生時代以降の各時期の活動痕跡が得られていたにもかかわらず、本調査区では、特筆するような遺構・遺物の検出をみなかった。調査面積の狭小さはあるものの、中世・近世の遺物包含層は堆積しているので、掘削などの土地への働きかけが希薄な空地であった可能性が高い。本部構内一帯における各時代ごとの遺跡のひろがりや土地利用状況の復元を進めていくうえで、参考とすべきデータが得られたといえよう。

立合調査の成果 総合人間学部構内の A 号館周辺で広域に実施した立合調査については、第 4 章においても詳述したが、弥生時代前期・古代～近世の遺物包含層や瓦溜を良好に確認し、遺物の採集と断面記録の作成をおこなったことで、地形環境を復元するうえで貴重な情報を残すことができた。このほかにも、遺物包含層が良好に確認されている調査としては、北部構内を縦断した258地点、総合人間学部構内の南縁にあたる259地点や264地点、医学部構内の268地点がある。とくに、264地点では複数層の堆積があり、弥生前期土器の底部も採集されている。一帯では新営されたテニスコート下に包含層はまだ残存しているとみられ、今後注意していく必要がある。このように、立合調査では、広域にわたる遺跡のひろがりや地形環境を把握するうえで重要な情報が得られる場合が多い。連絡体制や記録方法の改善をはかり、より精度の高い情報を獲得することが、今後の課題といえる。